

生態系に被害を及ぼすおそれのある宿根草(第3回)

職藝学院

教授 渡邊 美保子

1990年代のガーデニングブーム以降、外国産の宿根草が数多く植栽されるようになりました。近年、生態系と生物多様性を守るため環境省が「我が国の生態系に被害をおよぼすおそれのある外来種リスト」を作成して注意喚起を行うようになりましたが、園芸業者やガーデンデザイナーには浸透していないのが現状です。環境省の外来種リストになくても、タネが風で飛ばされて庭園外で繁殖する可能性があるのではないかと疑いたくなる宿根草もあります。

たとえば、北アメリカ原産のアカバナ科のガウラは、初夏から秋まで長く開花する宿根草です(写真1)。1株から多数のタネを作ります。タネは下から順に熟して地面に落ち、秋には発芽して越冬します。たまたま光を遮らない場所で芽生えた実生は、春に一気に大きくなります。これを放置しておくと花壇はいつの間にかガウラでうめつくされることとなりますので、実生が確認できたらなるべく早く抜き取ることをおすすめします。ゴボウのような根を持つため抜き取りにくくなるからです。



写真1 ガウラの桃色矮性品種。タネがこぼれて発芽した株。6月の様子。5月から11月まで開花する間に大量のタネを落とす。ガウラの寿命は長いので、この1株を残し、実生をすべて抜き取っている。

また、ガウラは開花期間が長いので、開花期間中に花茎を切り戻しても再び開花します。タネが完熟する前に月に一度ほど切り戻しを行うと、結実するタネを減らすことができます。定期的に切ることで草丈を抑えることもできます。

ヨーロッパ原産のセリ科のオルレアは、5月から

7月にかけて白いレースのような可憐な花が咲くことから近年植栽されることが多くなりました(写真2)。日本では夏の暑さで7月末には枯れてしまっていますが、大量にタネを作ります。そのタネが花壇に落ちて秋には地面いっぱい芽生え、まるで緑の絨毯のように広がります。これが冬を越して、翌年いっせいに開花します。雑草よりも強健です。タネは軽いので風に飛ばされると遠くまで運ばれますので、近くに草地などがある場合は注意が必要です。



写真2 オルレア。1株植えたあと、こぼれタネを放置した2年後の様子。左上のクサキョウチクトウの株の中に落ちたタネも発芽している。現在は、すべて撤去している。

ほかにも、フランネルソウ、バーバスカム、ルドベキアなど、タネが風で飛ばされやすく発芽率が高い宿根草は、花壇で実生を見つけたら抜き取るか、植栽しないことをおすすめします。

人の持ち込んだ外来種のうち10%が人の管理の外に出てしまい、そのうち10%が野外で繁殖し持続し続けることができ、さらにそのうち10%が生態系・経済に影響をもたらす侵略的外来種になるといわれています(Williamson & Fitter 1996)。これを10%則といいます。庭園で栽培している宿根草が逸出して生態系に影響を与える可能性は、ゼロではないということです。外国産の宿根草を栽培するときには大切なことは、観察力を養うことです。特にこぼれタネでどんどん増えてゆく種類については、人がコントロールをしながら育てる管理方法が必要です。